「～テイル」をめぐって

岡　野　ひ さ の*

1　はじめに

本稿の目的は、日本語の動詞の「～て」に「いる」が後接した「～ている」（以下「～テイル」）が何を表すのかを考えることである。「ドアが開いている」のようないわゆる「結果継続」、「ご飯を食べている」のようないわゆる「動作継続」、さらに「毎日食堂でご飯を食べている」のようないわゆる「反復」についてはすでに多くの指摘がある[1]。

しかし「もうドアが開いている」や履歴書を見ながら発話する「彼は大学を卒業している」のような～テイルに関しては、まだ議論が尽くされていないと思われる。そこで本稿では、先行研究である工藤（1995）の指摘を基に、このような～テイルに関して考察する。特に「もうドアが開いている」に関しては、いわゆる「完了」と呼ばれる「もうドアが開いた」との関連から詳しく述べる。

2　先行研究と本稿の考え方

工藤（1995）は、基本的に「もう/すでに～タ」と表される「完了」に対して、「もう/すでに～テイル」に代表される概念を提示する。そして両者の違い

* 福岡大学人文学部教授

[1]「結果継続」は「結果存続」「結果の状態」などとも、「動作継続」は「進行」などとも呼ばれるが、本稿では工藤（1995）に従う。

を示すために、以下の例を挙げている（pp. 97－98）。

（1）a. あなたが家庭を持つころにはもうとっくに死んでいるわよ。（*もう死んだ）

b. 私の父は、ガンで、もう死んでいます。（＝もう死にました）

c. 私が帰郷したときには、父は既に 3 時間前に死んでいた。（*既に死んだ）

工藤（1995）はこれら未来・現在・過去の例によって、「～テイル」がテンスから切り離された、派生的なアスペクト的意味を表すと指摘し、「パーファクト」と呼ぶ。そしてパーフェクトの規定として次の点を示す（p. 99）。

（2）ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力をもっていること

ただし工藤（1995）は、（2）と規定したパーフェクトの中に次の下線部のような文も含まれるとする（pp. 98－99）。

（3）警察医は吉田医師の推定と同様の過失死と断定した。ただ笠井の胃袋の中から相当量の山桃の実が不消化のまま出てきたのに首をかしげた。

「妙なものを食べていますね。」　　（霧と影）

本稿はこれらの工藤（1995）の指摘を再検討し、新たな提案をする。ただし、（1）のように「もう/すでに～テイル」に代表されるこの種の表現を、本稿も「パーファクト」と呼ぶ。

まず、（1）の動詞「死ぬ」は「死んでいる」が「死んだ」後の状態を表す動詞である。しかし～テイルが動作の継続を表す動詞もある。次に示すような場合である。

（4）a. 私が家に帰るころ、父はもう酒を飲んでいるだろう。

b. 私の父はもう酒を飲んでいます。（＝もう酒を飲み始めました。）

c. 私が家に帰ったとき、父はもう酒を飲んでいた。

通常（4）は「飲んだ」後の状態ではなく、「飲み始めた」後の状態と考えられる。しかし（4）は、次のような「飲んでいる」とは異なる。

（5）a. 私が家に帰るころ、父は（ちょうど）酒を飲んでいるだろう。
b. 私の父は（今ちょうど）酒を飲んでいます。
c. 私が家に帰ったとき、父は（ちょうど）酒を飲んでいた。

（5）は「動作継続」と呼ばれるように、酒を「飲む」という動作が単に継続中であることを示すに過ぎない。これに対し（4）は設定時点である今および「私が帰る/帰った」時点の状態が「飲み始めた」後である点を示している。

さらに（4）に一文を付け加え、次のような文脈にすると「飲んでいる」の意味は変わる。

（6）a. 私が家に帰るころ、父はもう酒を飲んでいるだろう。だから難しい話はできないに違いない。
b. 私の父は、もう酒を飲んでいます。（＝もう酒を飲みました。）だから難しい話はできません。
c. 私が家に帰ったとき、父はもう酒を飲んでいた。だから難しい話はできなかった。

（6）が意味するのは、酒を飲むことによって父に生じた変化、つまり酒に酔った状態である。これは一般に酒を「飲み終わった」後の状態と考えられ、（1）と同じように考えられる。

このように動詞によって「もう/すでに〜テイル」の意味が異なるのであれば、動詞の種類を考慮する必要がある。そこで3.1で、金田一（1976）による動詞の分類を基にどのような眼前事態が存在するかについて述べる。

さて、（1）は「死んだ」後の状態、（3）は酒を「飲み始めた」後の状態、（4）は酒を「飲むことによって酔った」後の状態である。この点からパーフェクトは、設定時点における何らかの動き・変化の後の「状態」を表す、と言えよう。換言すれば、（1）「死ぬ」、（2）酒を「飲み始める」、（3）酒を「飲む

ことによって酔う」ことは設定時点より「前」の動き・変化である。そこでパーファクトは、ある動き・変化が設定時点より「前」であることを表す、とも言える。また、未来・現在・過去において同様に現れることから、発話時点とは切り離されている、と考えられる。以上の点を踏まえ、（2）の規定に対して本稿では次のように規定する。

（7）発話時点と切り離された時系列において、ある動き・変化を設定時点より前に位置づけること

この規定の正当性については 3.2 と 3.3 で述べる。このように 3 節では、「パーフェクトとは何か」という本稿の考え方を示す。

さらに（3）の「妙なものを食べています」を、工藤（1995）は設定時点が現在であるパーフェクトとしている。これに対し本稿は、過去の事実を表す「妙なものを食べました」との比較から、（3）をパーフェクトとは考えず、過去の出来事の提示方法の一つと考える。（3）は過去の出来事を、出来事発生時の事実として示すのではなく、現存情報として示している。これについては 4 節で述べる。このように、本稿の「パーフェクト」は、工藤（1995）のパーフェクトとは異なり、（3）のような文は含まないので注意されたい。

そして、この過去の出来事に関する～タと～テイルという 2 つの表し方の違いが、設定時間が現在であるいわゆる完了とパーファクトの違いを説明すると考える。これについては 5 節で述べる。

3　パーフェクトとは何か

3.1　眼前事態を表す～テイルと～タ

金田一（1976：pp. 9－11）は時間的な観点から動詞を、状態を表わす動詞、動き・変化がある時間内続いて行われる動詞、動き・変化が瞬間に終わってしまう動詞、ある動き・変化を帯びることを表し常にテイルとともに用いる動詞の 4 つに分類し、それぞれ順に「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種

の動詞」と呼ぶ[2]。

状態動詞はその名のとおり終止形が状態を表すことから、例えば「あそこに人がいる」のように、その終止形によって眼前事態が表される。第四種の動詞も状態を表すが、眼前事態を表すには例えば「山が聳えている」のように常に〜テイルとしなければならない。瞬間動詞の場合はその名のとおり動き・変化が瞬間的であることから、例えば「ドアが開く」という動き・変化が眼前で起きた場合「ドアが開いた」と〜タで表され、その後の状態は「ドアが開いている」と〜テイルで表される。継続動詞は、その動き・変化の始まりと終わりに時間的な隔たりがあることから、眼前事態として発話者に認識されるのはその名のとおり動き・変化が継続している状態である。例えば「お菓子を食べている」であれば、お菓子を「口に入れ」「噛み」「呑み込む」という一連の動き・変化の継続状態であり、この継続状態を変えるような動き・変化は存在しない。これは「ドアが開いた」のような「動き・変化」に対して、ある種の「状態」であると考えられる。

このように考えると、眼前事態の描写に限って言えば、「状態」を表すか、「動き・変化」を〜タと表すか、の 2 通りしかないと言える。そして「動き・変化」は瞬間動詞の場合だけに限られ、その他の場合は広い意味の「状態」を表し、終止形が状態を表す「いる」のような状態動詞を除けばすべて〜テイルと表される。

3.2　眼前事態を表す「もう/すでに〜テイル」

前節で示した例文を「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」の順にまとめて（8）として示す。（8a）が状態動詞、（8b）が継続動詞、（8c）

[2] 田窪（2012）は、「継続動詞」に当たる「活動動詞」、「瞬間動詞」あるいは「結果動詞」（藤井 1976）に当たる「到達動詞」のほかに、「着る」のような「達成動詞」を挙げている。

(8d) が瞬間動詞、(8e) が第四種の動詞である。

（8）a. あそこに人がいる。
　　b. お菓子を食べている。
　　c. ドアが開いた。
　　d. ドアが開いている。
　　e. 山が聳えている。

この文に「もう」を付加すると、次のようになる。

（9）a. もうあそこに人がいる。
　　b. もうお菓子を食べている。
　　c. もうドアが開いた。
　　d. もうドアが開いている。
　　e. *もう山が聳えている。

まず、(8e) が許容されるのに対して (9e) が許容されないという点から、パーフェクトは何らかの「動き・変化」が想定されなければならない、と言える。動き・変化が想定されるとは、必ずしも文中の動詞が動き・変化を表すということではない。(9a) の動詞「いる」自体は動き・変化を表さないが「あそこに人がいない」から「あそこに人がいる」という動き・変化があったと想定されるために許容される[3]。一方 (9e) は、「山が聳えていない」から「山が聳えている」という動き・変化を人間の時間感覚では想定できないことから、(9e) は許容されないと考えられる。この点は「もう/すでに〜テイル/タ」に対して「まだ〜テイナイ」が一対と考えられるということがその傍証となろう。(9e)「もう山が聳えている」も許容されないが、「まだ山が聳えていない」もまた許容されない。

では、(8abcd) と (9abcd) の違いは何か。（9）の文の前に一文を付加し

[3] ただしパーフェクトの例示としては、〜テイルを用いる。

た次の文はすべて適格になる。

（10）a. 私たちが一番のりかな。もうあそこに人がいる。
　　b. 彼女の部屋にお茶に誘われたけど…。もうお菓子を食べている。
　　c. 開場時間まであと 5 分か。もうドアが開いた。
　　d. 開場時間まであと 5 分か。もうドアが開いている。

これに対して、次の一文を付加した文脈においては許容されない。

（11）a. いい天気だなぁ。*もうあそこに人がいる。
　　b. 彼女、部屋にいるかなぁ。*もうお菓子を食べている。
　　c. この建物も古くなったなぁ。*もうドアが開いた。
　　d. この建物も古くなったなぁ。*もうドアが開いている。

（10）と（11）の違いは何か。（10）では発話者が文中の事態を予想できる状況であるのに対し、（11）ではそれを予想できる状況にはない。つまり、パーフェクトの文においては発話者がその事態を予想できる状況になければならない、と言える。因みに「もう」がない文においては、次のように前の文に関係なく許容される。

（12）a. 私たちが一番のりかな。あそこに人がいる。
　　b. 彼女の部屋にお茶に誘われたけど…。お菓子を食べている。
　　c. 開場時間まであと 5 分か。ドアが開いた。
　　d. 開場時間まであと 5 分か。ドアが開いている。

（13）a. いい天気だなぁ。あそこに人がいる。
　　b. 彼女、部屋にいるかなぁ。お菓子を食べている。
　　c. この建物も古くなったなぁ。ドアが開いた。
　　d. この建物も古くなったなぁ。ドアが開いている。

このパーフェクトの文における、「発話者がその事態を予想できる状況になければならない」ということを、眼前事態つまり現在だけでなく未来や過去にも適応できるように一般化すると、発話者にとって「その事態が既知でなけれ

ばならない」と言えよう。設定時点が過去の場合、発話者は過去の事実として動き・変化を認識しており、設定時点が未来の場合はその動き・変化が未来のある時点において起こると知っている。

工藤（1995）の規定「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っている（p. 99）」では（11）が不適格になる点が説明できない。「設定された時点」である「現在」において観察される眼前事態はすべて「それよりも前に実現した運動」つまり文中の事態が「ひきつづき関わり、効力を持っている」と言えよう。

これに対し、（7）「発話時点と切り離された時系列において、ある動き・変化を設定時点より前に位置づけること」であれば、次のように説明できる。何かを時系列において位置づけるためには、その「何か」が発話者にとって既知でなければならない。未知の事柄を時系列上に位置づけることは不可能である。既に多くの指摘があるように、「*何はいいですか」や「*あるところにおじいさんとおばあさんはいました」のように未知の事柄を助詞「は」で取り立てることはできない。（11）が不適格になるのは、これと同じ理由である。

3.3 「早い」という印象

さて（10a）では「あそこに人がいる」ことが、（10b）では「彼女がお菓子を食べている」ことが、（10c）では「ドアが開いた」ことが、（10d）では「ドアが開いている」ことが「早い」という印象を受ける。これはなぜだろうか。以下に（10）を再掲する。

（10 再）a. 私たちが一番のりかな。もうあそこに人がいる。
b. 彼女の部屋にお茶に誘われたけど…。もうお菓子を食べている。
c. 開場時間まであと 5 分か。もうドアが開いた。
d. 開場時間まであと 5 分か。もうドアが開いている。

なぜ「早い」という印象を受けるのか、工藤（1995）の「ある設定された時

点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っている（p. 99）」では説明ができない。次のような文脈においては「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っている」と考えられるが、いずれも許容しがたい文である。

（14）a. 遅くなっちゃったね。??もうあそこに人がいる。
　　b. 彼女にお茶に誘われたけど、遅れちゃった。??もうお菓子を食べている。
　　c. 開場時間 5 分過ぎか。??もうドアが開いた。
　　d. 開場時間 5 分過ぎか。??もうドアが開いている。

（10）の「早い」という印象は、発話者が設定時点より動き・変化が「後」と予想している状況において、その動き・変化が設定時点より「前」に位置づけられることから受ける印象である。つまり、（7）「発話時点と切り離された時系列において、ある動き・変化を設定時点より前に位置づける」ことによって生じる印象である。そしてなぜ予想が可能かといえば、発話者がその動き・変化が起こることを知っているから、つまり既知の動き・変化だからである。

これに対して、逆に設定時点より動き・変化が「前」であると発話者が予想している状況において、その動き・変化が設定時点より「後」に位置づけられれば「遅い」という印象を与える。そして、それは以下のように「まだ～テイナイ」と表される。

（15）a. 遅くなっちゃった。まだ人が誰もいない。
　　b. 彼女にお茶に誘われたけど、遅れちゃった。まだお菓子を食べていない。
　　c. 開場時間 5 分過ぎか。まだドアが開かない。
　　d. 開場時間 5 分過ぎか。まだドアが開いていない。

これが「もう/すでに～テイル」と「まだ～テイナイ」が一対と考えられる理由である。

4　現存情報に基づく～テイル

2節で（3）の「妙なものを食べています」を本稿ではパーフェクトとは考えないと述べた。

（3再）警察医は吉田医師の推定と同様の過失死と断定した。ただ笠井の胃袋の中から相当量の山桃の実が不消化のまま出てきたのに首をかしげた。

「妙なものを食べていますね。」　　（霧と影）

この「妙なものを食べています」をパーフェクトとは考えない理由は、本稿がパーフェクトを（7）「発話時点と切り離された時系列において､ある動き・変化を設定時点より前に位置づけること」で､「ある動き・変化」は発話者にとって「既知でなければならない」と考えるからである。（3）において発話者である警察医は「(笠井は）妙なものを食べました」とは言えず､「妙なものを食べた」ことは発話者にとって既知ではない。

他にも例えば、ほとんど知らない彼について、彼の「履歴書を見ながら」話す場合（16a）となり、(16b）とは言えない。

（16）a. 彼は去年大学を卒業しています。

b. 彼は去年大学を卒業しました。

（3）および（16）の例から、過去の出来事に言及する場合、その出来事をどのように知ったかが関係する､と考えられる。(3）は胃の中の内容物によって発話者は「妙なものを食べた」と知り、(16a）は履歴書によって「彼は去年大学を卒業した」と知る。つまり胃の中の内容物や履歴書という「現存情報」に基づいて過去の出来事について述べている。一方「妙なものを食べました」や（16b)「彼は去年大学を卒業しました」は過去の出来事をその発生時に「事実」として見たり聞いたりして知っている。これは「現存情報」による出来事の認識に対して､「事実」の認識と言えよう。つまり（3）(16a）は現存情報に基づく､(16b）は発生時における事実に基づく過去の出来事の提示と

言える。

しかし、ある出来事を発生時に事実として知った場合であっても、（3）（16a）の〜テイルは適格になる。これはなぜか。前述のように、現存情報だけに基づく場合は〜テイルだけしか適格にならないことから、次のように考えられる。発話者がある出来事をその発生時に事実として認識し、それを記憶している場合、その記憶がある種の現存情報と捉えられ、発話者はそれに基づいて（3）や（16b）のように提示することができる。

以上をまとめると次のようになる。ある過去の出来事をその発生時に事実として認識した場合、過去の事実として提示するか、現存情報による出来事として提示するか、という2つの提示方法が可能であり、過去の事実として提示するならば（16b）のように〜タで、現存情報による出来事として提示するならば（16a）のように〜テイルで表される。本稿はこのような〜テイルを過去の出来事の「現存情報提示」と呼ぶ。パーフェクトとは異なる〜テイルである。

5　完了とパーフェクト

5.1 「完了」と「パーフェクト」の違い

4節で、過去の出来事を提示する方法は、過去の事実として表す場合と、現存情報による出来事として表す場合の2通りあると述べた。この点が、「完了」と「パーフェクト」との違いでもあると考えられる。

つまり、設定時点である現在において動き・変化を「既成事実」として表す場合が「もう/すでに〜タ」という「完了」である。一方、設定時点である現在における動き・変化後の状態を「現存情報」として表す場合が「もう/すでに〜テイル」という「パーフェクト」である。具体的には（16a）に「もう」を付加した次の（17a）が記憶なども含む現存情報として示したパーフェクトであり、（16b）に「もう」を付加した次の（17b）が既成事実として示した完了である。

（17）a. 彼はもう去年大学を卒業しています。

b. 彼はもう去年大学を卒業しました。

このように、完了は動き・変化を「既成事実」として示し、パーファクトはそれを「現存情報」として示している、と言える。

5.2 過去と未来に完了が存在しない理由

5.1で示したように現在時制の文では、現存情報として表すか、過去の既成事実として表すか、によって「もう/すでに〜テイル」と「もう/すでに〜タ」の2通りの表現が可能であった。しかし、テンスが過去の場合および未来の場合は〜テイルという表現しか許容されない。これはどうしてだろうか。

まず、設定時点が過去の場合について眼前事態を認識した（10）を基に考える。（10）を過去の出来事として表すと次のようになる。

（18）a. 私たちが会場に着いたとき、もうそこに人がいた。

b. 私が彼女の部屋に着いたとき、彼女はもうお菓子を食べていた。

c. ??私たちが開場5分前に着いたとき、もうドアが開いた。

d. 私たちが開場5分前に着いたとき、もうドアが開いていた。

（18abd）は問題ないが、（18c）は許容度が低い。（18c）は「もう」を次のように「ちょうど」に変えれば適格になる[4]。「私たちが開場5分前に着いた」のと「（会場の）ドアが開いた」のが同時であると考えられる。

（19）私たちが開場5分前に着いたとき、ちょうどドアが開いた。

---

[4]（18c）以外の（18abd）も、次のように「もう」にかえて「ちょうど」を補うことができる。

a. 私たちが会場に着いたとき、ちょうどそこに人がいた。

b. 私が彼女の部屋に着いたとき、彼女はちょうどお菓子を食べていた。

d. ??私たちが開場5分前に着いたとき、ちょうどドアが開いていた。

しかしこれらの「ちょうど」は「たまたま」や「偶然」と置き換えることができる。そのためにd.のようにある動き・変化が、この場合は「ドアが開く」が確実に起こると発話者が確信している場合は許容度が下がる。

このように過去時制における「〜タとき、〜タ」は、2つの動き・変化が同時であることを意味する。また過去の設定時点において、さらにそれより前の動き・変化を「既成事実」として表そうとすれば「〜タとき、もう/すでに〜タタ」となろうが、そのような表現は存在しない。そこで過去時制においては「〜タとき、もう/すでに〜テイタ」というパーファクトになると考えられる。

次に未来時制の場合を考える。(18) と同様に (10) をもとに考えると、次のようになる。ただし未来の予想であることから、c. d. は開場時間すぎを想定するが、正確な時間は示さない。

(20) a. 私たちが会場に着くころ、もうそこに人がいるだろう。
b. 私が彼女の部屋に着くころ、彼女はもうお菓子を食べているだろう。
c. ??私たちが会場に着くころ、もうドアが開くだろう。
d. 私たちが会場に着くころ、もうドアが開いているだろう。

過去時制の場合と同様に、(20c) は許容しがたく、次のようにすれば許容される。

(21) 私たちが会場に着くころ、ちょうどドアが開くだろう。

このように未来時制においても「〜ルとき、〜ルだろう」は2つの動き・変化が同時であることを意味する。また未来の設定時点において、それより前の動き・変化を「既成事実」として表そうとすれば「〜ルとき、もう/すでに〜タだろう」が考えられる。しかし「もう/すでに〜タだろう」は現在時制における完了の推量である。そこで未来時制においては「〜ルとき、もう/すでに〜テイルだろう」というパーファクトになると考えられる。

以上のように、過去と未来においてはパーフェクトしか存在しない。つまり過去と未来においては、現存情報としてのみ示される。設定時点が過去・未来という現存情報であるならば、それより前に位置づけられる動き・変化が現存情報として示されることは当然であるとも言えよう。

6　おわりに

本稿では工藤（1995）の指摘をもとに、以下の3点について述べた。まず、パーフェクトとは「発話時点と切り離された時系列において、ある動き・変化を設定時点より前に位置づけること」である。このように規定すれば、パーフェクトで表される事態は「発話者がその事態を予想できる状況になければならない」こと、またパーフェクトで表される事態が「早い」という印象を与えることの理由が説明される。

次に、過去の出来事を表す方法が2通りあることを述べた。過去の出来事をその発生時の事実として表す方法と、現存情報による出来事として表す方法である。工藤（1995）はこの後者をパーファクトの1つとするが、本稿はこれを過去の出来事を提示する1つの方法と考え、この種の～テイルを「現存情報提示」と呼ぶ。

そして、この2つの過去の出来事の提示方法の違いをもとに、現在時制における完了とパーフェクトとの違いについて述べた。完了は既成事実として表し、パーフェクトは現存情報として示す、という違いである。さらに過去時制と未来時制において～タで表される完了が存在しない点にも言及した。

最後に本稿の根本にある考え方を示しておく。基本的に「～ル/タ」が「動き・変化」を表すのに対して、「～テイル/～テイタ」は広い意味の「状態」を表すと考える。具体的には次のような状態である。

いわゆる「結果継続」は（動き・）変化が終わった後の状態、いわゆる「動作継続」は動き（・変化）が続く状態であり、これらは近視眼的に状態を捉えている。いわゆる「反復」は「動作継続」を遠視眼的に捉えた用法であると考えられる。「ご飯を食べている」はご飯を「口に入れ」「噛み」「飲み込む」動きを繰り返すという近視眼的な動きの継続状態であり、「毎日食堂でご飯を食べている」は「食堂でご飯を食べる」動きを日々繰り返すという遠視眼的な動きの継続状態である。

「パーフェクト」は発話時点と切り離された時系列において、設定時点が動き・変化の後の状態であることを示す。さらに現在時制においては、過去の出来事を表す方法として、過去における動き・変化として表すか、現存情報として表すかという2通りの方法があり、後者の「現存情報提示」は広い意味の「状態」と言える。

これらが「～テイル」の表す「状態」であると考えられる。工藤（1995）は現存情報提示をパーフェクトに含めるが、「過去」と「完了」を区別するのであれば、「現存情報提示」と「パーフェクト」も区別されるべきであろう。

参考文献

岡野ひさの（1999）「判明を表すタの用法」『日本語教育』pp.1－11
金田一春彦（1976）「動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』pp.5－26,麦書房
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
田窪行則（2012）「時間の前後関係としての日本語テンス・アスペクト」『日本語文法』12(2)，pp.65－77，くろしお出版
藤井正（1976）「「動詞＋ている」の意味」『日本語動詞のアスペクト』pp.97－116，麦書房